

意味のなさそうな活動こそ

その意味をよみときたい

河邊 杲

一歳三か月の孫（男児）が「ウマウマ」と言いながら、いつも座らされる食卓の子ども用の椅子のところにいき、それにのぼろうとする。椅子は食卓の方に向いているので容易にのぼれない。ガタガタとゆり動かす。（あたかも位置や方向を変えようとするかのように見える。）なかなか思うようにならない。近くにいた私の手を引っぱる。ついで行くと椅子の上へのぼりたいという要求を身体で示す。「ここのぼりたいの」と言いながら（のぼりたいので

あれば自分でこころみるであろうと思い）椅子を少し食卓から離しのぼれるように椅子の位置を動かす。すると待っていたとはかりに子ども用椅子の脚のせのところに両膝をのせ、肘かけの部分を持ち腰をかけるところにのぼろうとするがなかなか思うようにはできない。

手の位置をあちこちに持ちかえて試みる。勿論、腕の力を使っているが、懸垂するような要領はまだ生じない。脚の位置も左右交互に床上におろすよ

うにしてみたり試みるがままならず、手の握り方を
変え膝関節や大腿の筋肉を使って腕力で引っばりあ
げようと全身の機能をフルに働かせて必死になって
いる。

まわりの大人たちはその余りにも真剣な姿にひた
すら「よいしょ」とかけ声ではずみをつけるよう声
援をする。十二、三分したところで、とうとう降り
たいと降りようとするが脚がとどかないので大人を
呼び手助けしてもらってようやく降りる。降りして
もらったのだが自分で降りたような素振りでさっさ
とメートル程の床にごろりと横になり、ひっく
りかえる。仰むげに寝た姿勢をとる。その姿勢を見
ていると疲れたように見える。そしてもうあきらめ
て別のことをするのではないかと思ったら一分も
経ったら、むくむくと起きあがってまた椅子のここ
ろに行き再挑戦しはじめる。また持ち手をいろいろ
変え、膝を屈伸するように上下、前後、左右に動か
してみる。しかしうまく思うようにいかぬ。十分位

経ったら今度は自分で脚をのぼして降り、また一
メートル離れた位置にごろりとひっくりかえる。ま
た一分もたないうちに起きあがり再度の挑戦を試
みる。余りの根のよさに心ひかれてか家内がいつの
間にか側に座って見ている。つい彼のお尻のところ
に少し手をそえるようにしたかと思うとそのはずみ
で椅子の脚のせに立つことができ、椅子のところに
反対向きではあるが膝を立ててのることができた。
なんとか向きを変えて座ろうとするが自分ではうま
くできずそのままあちこちを見渡している姿は満足
感を満喫しているように見えた。二、三分その上に
居たがその後降りると今度は大人のスリッパを見つ
け片足にひっかけて歩くことをはじめ、もう椅子に
は目もくれない様子だった。

この椅子のぼりの活動でのぼろうとする目的とそ
の意欲やその達成のための工夫など、その時の意味
やこの子に、こんな力がと新しい発見もあったのだ
が、そのプロセスに起こったひっくりかえりの現象

は何を意味しているのか、すぐに理解することはむずかしかった。「たださぞ疲れたのだろう」という私たちの意識的判断で軽く受けとめたのであるが、しばらくして、なにか意味がかくされているように思われた。それは丁度その頃、歩行もまだたしかな歩とまでは行かず、時々つまずいて膝や手をつくことがあるとそのまま地上などにべたりとねころび大人の援助を待つ姿勢をとる様子がみられたそのことが想起され、単なる疲れをとりもどすような意味のみでなく、自分の力でどうにもならないときの大人への支援を求める依存したいサインの経験がその一連の活動の中心にくみこまれていたのではないかと思われたのである。一つの未来へ向かっての目的な自発的活動の中にふと過去の依存的な意味をもつ活動が連鎖的に組みこまれて時間と空間を含んだ全体構造をなしているのではなからうかとも思われる。さりげない意味のなさそうに見える活動にもこ

うした過去の経験的な情報やイメージなども含むもつとすれば、子どもの成長にとって重要な意味をもつものと考えなければならぬ。

子どもは自らの自分らしいしぐさを味わい持ちながら生活しているように思われる。いろいろな活動はその子どもにとって意味のあるものであり、ひとりひとりの子どもにとってゆったりとすごせるそれに必要な時間と空間とその状況が確保されなければならぬであろう。

それは人間はどういう生き方をするものか「生きた存在」に私たちがかわかっていく生き方を私たち自身が自分に対して訓練していかねばならないと思われる。あまりにも私たちは人間を知らなすぎるように思う。

(洗足学園短期大学)